

分 か る と 快 感 ！

Z会ナビ

算数 理科 ▶ 歴史 地理

お題

江戸で火事が 多かったのはなぜ？

(一橋大学 2015年 日本史)

「Z会ナビ」が
Webサイト
でも読めます！



Z会おとナビ新聞

検索

これまでの内容も掲載しています！

近年の日本では災害が多発し、防災対策の整備が重要な課題とされています。江戸時代においても、多様な災害がくり返し人々を襲いました。1657年には、江戸で大きな災害が起こり、10万人を超えるとも言われる死者を出しました。

また、飢饉も大きな被害をもたらした災害のひとつです。江戸時代には享保・天明・天保の飢饉など、多くの死者を出した飢饉が何度も起こりました。

下線部の災害は明暦の大火と呼ばれる、非常に大きな火災でした。これ以降も、火災は都市部を中心に多く起こりましたが、その理由を説明しなさい。

明暦の大火は世界三大火事にも数えられると言われるほど、非常に大きな災害でした。今回は、江戸でなぜ火災が多かったのか、それに対し、江戸幕府はどのように対応していったのかを見ていきましょう。

火事とけんかは江戸の華

「火事とけんかは江戸の華」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。このような言葉があるほど、江戸では火災が多く起こりました。江戸市民にとって火災は当たり前の災害であり、大工・鳶職人など建築関係の職業は、火災の後の復興作業により仕事が増えるため、火災を喜んだ、という説まであるほどです。

江戸で火災が多く起きた背景にあるのは、人口の集中です。徳川家康により幕府の中心が江



イラスト・瑞木匠

人口の集中で

戸に置かれると、参勤交代などの制度もあいまって、多くの武士の屋敷が江戸城の周辺に集まりました。そして武士の生活を支える商人や職人も多く住むようになり、江戸への人口集中が進みました。飢饉などの災害で農村が荒れると、職を求める人々の移住も進み、さらに人口が集中することになりました。町人の多くは狭い居住区域に密集して木造の住宅を建てて住みましたので、ひとたび火災があればあっという間に延焼してしまったのです。

江戸時代の防災

江戸市民にとって火災は当たり前、とは言っても、やはり幕府にとって大きな損失ではありますので、被害を最小限に食い止めるべく、防災対策がなされました。対策のひとつは消防組織の整備です。はっぴを着てまといを振るう火消しはこのときに整備されたものです。

もうひとつは都市計画です。住宅の延焼を防ぐための火よけ地と呼ばれる広場・空き地が、防災対策として各所に設けられました。現在も地名として残る「広小路」は、火よけ地の機能をもたせた、幅が広い道路のことです。また、江戸の郊外には「下屋敷」と呼ばれる大名の庭園が設けられ、火災の際に人々が避難する場所として整備されました。現在の築地市場や新宿御苑、明治神宮などはいずれも大名の下屋敷があった場所です。いずれも、東京都心には珍しく、広大な敷地がありますね。

【Z会・河原井彩】

！今回の教訓

江戸の火事ほどではないかもしれませんが、災害はいつ起きるかわかりません。就寝前に枕元にわらじを置いていた江戸市民を見習って、身の回りの備えを確認してみましょう。



河原井彩さん 2007年にZ会入社。大学受験用の日本史、政治・経済の教材編集を経て、現在はデジタル技術を使った未来の教材を考えています。新潟県生まれの埼玉県育ち。